



2022 7.16 sat.  
10.16 sun.

東京都現代美術館  
コレクション展示室  
主催  
東京都、  
公益財団法人  
東京都歴史文化財団  
東京都現代美術館

Saturday, 16 July– Sunday, 16 October 2022  
Museum of Contemporary Art Tokyo, Collection Gallery

Rewinding the Collection 2<sup>nd</sup>

コレクションを巻き戻す

2<sup>nd</sup>

MOTコレクション

MOT Collection:

ごあいさつ

東京都現代美術館は、戦後美術を中心に、近代から現代に至る約5,500点の作品を収蔵しています。「MOTコレクション」展では、会期ごとに様々な切口を設けて作品を展示し、現代美術の持つ魅力の発信に努めています。

本展は、当館が開館(1995年)にあたり作品を引き継いだ東京都美術館時代も含むコレクションの歴史を紐解き、制作年順に展示した「コレクションを巻き戻す」展(2020-21年に開催)の続編です。今回は、「読売アンデパンダン」展に工藤哲巳ら反芸術の作家たちが結集していた1960年代へと遡り、1975年に都美術館の新館が開館し、作品収集や企画展が本格化する頃までを、館の歴史や作品の展示をめぐるエピソードとともに辿ります。続いて1975年頃から1990年代にかけては、東京都美術館と東京都現代美術館という2つの館で開かれた企画展を手がかりに、様々な作家たちとの関わりにおいて収蔵された作品に光をあてます。

「MOTコレクション」と一言にいても、都美術館の旧館時代、作家が団体展で発表して間もなく収蔵された作品もあれば、展示した企画展を機に、あるいは、時を隔ててコレクションを補完するように収蔵された作品もあり、今ここに至る経緯や、かかった時間は実にさまざまです。本展では、そうして作品に襲のように織り込まれた幾つもの時間を行き来しながら、2フロアを通してコレクションを巻き戻し、多彩な作品を楽しんで頂くとともに、「MOTコレクション」のこれからの歩みにも思いを馳せる機会にしたいと思います。

## Foreword

The Museum of Contemporary Art Tokyo houses approximately 5,500 artworks in its extensive collection, which spans the modern and contemporary periods with a focus on art of the postwar years. Each installment of the “MOT Collection” exhibition introduces artworks in the collection from various themes and angles in its effort to convey the diverse appeal of contemporary art.

This is the sequel to the exhibition, “MOT Collection: Rewinding the Collection” (held 2020-2021), which presented a variety of works in chronological order while unraveling the history of the collection including works that were transferred from the Tokyo Metropolitan Art Museum upon the opening of the Museum of Contemporary Art Tokyo in 1995. On this occasion, we rewind to the 1960s when artists of the anti-art movement such as KUDO Tetsumi had come together to present work in the “Yomiuri Independent Exhibition,” and from there introduce various episodes regarding the exhibit of specific works and the history of the museums in an attempt to trace the various events leading up to the time in which the Tokyo Metropolitan Art Museum actively began developing its collection and organizing special exhibitions in tow with the completion of its new building in 1975. Then from 1975 to the 1990s, we shed light on works collected in relation to various artists while focusing on a number of special exhibitions that were held at the Tokyo Metropolitan Art Museum and Museum of Contemporary Art Tokyo.

The works that are housed in the “MOT Collection” had each come to be collected under various times and circumstances. While some were collected shortly after being introduced in exhibitions held in the Old Building era of the Tokyo Metropolitan Art Museum, there are others that were acquired on the occasion of special exhibitions, as well as works collected at different times with intentions to complement the previous collection. In this exhibition we attempt to rewind the collection across two floors of the museum, while going back and forth between the multiple layers of time that are woven like folds into the works. In doing so, we invite viewers to enjoy a diverse array of artists’ creations while also facilitating an opportunity to think about the future of the “MOT Collection.”

## 1. 「読売アンデパンダン」展と、20年後の「1960年代」展

The “Yomiuri Independent Exhibition” and the “1960s Exhibition” 20 Years Later

2020-21年に開催した「コレクションを巻き戻す」展では、洋画の黎明期、明治時代に描かれた五姓田義松《清水の富士》(c.1880)から1950年代末までを辿りました。それに続く本展では、前回最後に展示した中西夏之《韻》(1959)を導入に、1960年代からスタートします。米軍演習場内で葉きょうを拾っていた日本人女性を米兵が射殺したジラード事件(1957)などで基地反対運動が激しさを増すなか、国民に大きく広がった60年安保闘争、そして戦後復興の象徴としての東京オリンピック(1964)を経て、社会の都市化が進み、高度経済成長へと向かっていく激動の時代です。

さて、当館がそのコレクションを引き継いだ東京都美術館の歩みをこの時代まで巻き戻すと、戦後再建した美術団体展の会場としての役割を主軸としながら、小規模に始まっていた作品収集活動が次第に拡大し、初の所蔵作品展「日本洋画壇の流れ」(1962)が開かれた時期にあたります。戦後、桂ゆきらと「女流画家協会」を設立した藤川栄子による《かける》は、二科展に出品した同年の1960年に収蔵され、旧館の佐藤記念室で開かれたこの所蔵作品展の「現存作家の部」にも並びました。

当時、同じ都美術館を会場としながら団体展と対照を見せる無審査・自由出品制の「読売アンデパンダン」展(1954年開始、日本アンデパンダンから改称、読売新聞社主催)では、日用品や廃品を素材に、既成の美術の概念を打ち破る動きを見せた「反芸術」の作品が、回を重ねるごとに過激さを増していました。作品撤去事件や、美術館による「陳列作品規格基準要綱」の制定などもあり、1964年には読売新聞が突如その中止を宣告するに至ります。

こうしてある意味では美術館が考える基準——既存のジャンルや展示のルールからはみ出した一連の作品が、20年後の都美術館で、「現代の動向II 1960年代 多様化への出発」展(1983)などを機に収蔵されていきました。本展に並ぶ作品の多くも、学芸員が着任し、作品収集や企画展が本格化した、1975年の新館開館以降に収蔵されたものです。1981年に始まった、戦後から現代までを総覧する試みとしての「現代美術の動向」シリーズでは、「反芸術」的傾向をはじめ、1950年代後半から60年代にかけて日本を席卷した「アンフォルメル旋風」や、大衆消費社会を背景に展開されたポップ・アートから影響を受けた作家たちなど、この時代の様々な動向が戦後美術の流れの中に位置づけられ、捉え直されていきました。近年、東京都現代美術館では、九州派の田部光子や日本画家・舞台美術家の朝倉摂らのこの時代の女性作家の作品収蔵も精力的に進めています。

## 2. 30年後の「1960年代」展

The “1960s Exhibitions” 30 Years Later

東京都現代美術館の海外美術のコレクションにも、1960年代の作品が多く含まれます。開館にあたって都美術館から移管された3000点のコレクションのうち、その中核をなすのが日本の戦後美術でした。それを「より客観的に理解するための同時代の海外の動向を示す作品」が、東京都美術資料取得資金(1988)によって収集されたのです\*。

これらの作品は、現代美術の流れをわかりやすく示す常設展示、そして開館記念展第3弾の「レボリューション／美術の60年代」展(1995)でも紹介されました。この展示では、欧米を中心に展開されたポップ・アート、ミニマル・アート、コンセプチュアル・アートなどの動向や、芸術と日常生活の境界を取り払う「フルクサス」をはじめとする作家たちのパフォーマンスなど、国内外美術館の所蔵作品も含みつつ、今日的美術へと繋がる起点として、30年前の美術を幅広く取り上げました。

翌年の「日本の美術 1964」展では、戦後の混乱期から国際化の波が押し寄せてくるこの時期の日本へと目を転じ、戦後美術の転換期として、東京オリンピックの開催年であった1964年に光をあてています。アンフォルメルの絵画や反芸術などの前衛的傾向のみならず、美術団体の発表の場であった都美術館の歴史を踏まえ、都美術館での「1960年代」展には含まれていなかった団体展への出品作品——再興第50回院展に出品された北沢映月(1907-1990)による《三人のモデル》など——も展示されました。

さて、1960年代の時間軸に再び戻ると、読売アンデパンダンの中止後、美術館という既存の展示空間を出て、生活空間に表現の場を求める作家たちの動きが一層加速していきました。首都高速道路や東海道新幹線の開通など、オリンピック前に急激な変貌を遂げた東京で、ハイレッド・センターが行った「首都圏清掃整理促進運動」や、観光芸術研究所の「路上歩行展」など、都市空間に突如現れ、社会を「攪拌」するように、様々なパフォーマンスが展開されました。こうした物体としての作品が残らないパフォーマンスの記録写真や映像は、特に2010年代以降の「MOTコレクション」での展示などを機に、日本の戦後美術の流れを補完するものとして収蔵が進んでいます。

なお、都美術館の運営審議会は1965年、東京都教育委員会から「東京都美術館のあり方」をめぐる諮問を受け、「(1)現代美術の常設展示場(2)現代作家の新作発表の場(3)社会教育の活動の場」としての機能をあわせもつ必要があると答えました。建物の老朽化も受けて、1968年には美術館建設準備委員会が設置され、新館開館に向けての準備が進められていきます。

\*前回の「コレクションを巻き戻す」第2部では、東京都美術資料取得資金(1988)による海外美術のコレクションをまとめた形で紹介しました。

3.

## 「人間と物質」展と、1970年代

“10th Tokyo Biennale: Between Man and Matter” and the 1970s

都美術館の新館に向けて「美術館建設準備委員会」が設置された1968年は、世界各地でデモや暴動事件が多発し、日本でも学園闘争やベトナム反戦運動などが広がっていました。万博破壊共闘派が、アングラ文化の拠点となった新宿の街、あるいはバリケードで封鎖された京都大学などで行ったパフォーマンスや彼らの参加したデモの記録も、当時の様子を色濃く伝えています。

1970年には、高度経済成長のさなか、「人類の進歩と調和」というテーマを掲げた日本万国博覧会(大阪万博)が開かれます。6700万もの人が押し寄せたというこの国民的祭典には、メタポリズムの建築家らと共に、多くの前衛芸術家—万博に対して批判的な態度を持つ人も含め—が関わり、近未来的なヴィジョンが描きだされています。これに先立つものとして1966年には「空間から環境へ」展(松屋銀座)が開かれました。「エンバイラメント」という言葉のもと、人間とそれを取り囲む「環境」との動的な関係、最先端のテクノロジーとアートを融合させたインターメディア的な表現などが志向されました。その参加作家である山口勝弘、多田美波、高松次郎、三木富雄らの作品は、都美術館の「現代の動向II 1960年代 多様化への出発」展(1983)にも出品されています。

この万博会期中、都美術館では「第10回日本国際美術展 人間と物質」(毎日新聞社主催)が開かれていました。賞制度と国別参加が廃され、コミッショナーに選ばれた美術評論家・中原佑介が欧米と国内各地を訪れ選んだ若手作家40名が参加し、万博とは好対照をみせる還元主義的な美術動向—アルテ・ポヴェラ、ミニマル・アート、コンセプチュアル・アート、もの派などをいち早く紹介し、もの派を国際的な文脈に位置づけた展覧会として知られています。作家たちが各々のコンセプトにもとづきつつ、現場の状況に合わせて仕事をする「臨場主義」によって生まれたこの展示は、作品の構造や展示の在り方の一つの転換を示すものでもありました。

それから10年以上を経て、都美術館で1984年に開かれた「現代美術の動向III 1970年以降の美術—その国際性と独自性」では、「人間と物質」展に参加した榎倉康二、高松次郎や、もの派の作家として知られる李禹煥、コンセプチュアル・アートの河原温など、作家ごとに展示空間が構成され、安齊重男が「人間と物質」展当時に撮影した作家たちの制作・展示風景も壁一面に並びました。

本展では、当館開館時に収蔵された「ランド・アート」の作家として知られるロバート・スミッソンの《コーナー・ピース》や、近年収蔵された彦坂尚嘉による《フロア・イベント》など、1970年代前後に既存の展示空間や制度をめぐる問いかけを孕みつつ制作された作品を併せて展示します。

4.

## 東京都美術館新館の開館

The Opening of the New Building of the Tokyo Metropolitan Art Museum

人々が列柱を仰ぎ見るように階段をのぼる、威厳に満ちた姿を見せていた旧館の建物とは対照的に、1975年に開館した東京都美術館の新館は、地下をメインエントランスとし、建築家・前川國男により、上野公園の自然に調和するように設計されました。生まれ変わったのは建物のみならず、美術館の事業全体に及びました。「美術館」としての在り方が様々な形で問われる中で、団体展の会場という「新作発表」としてのこれまでの機能は保ちつつも、新たにコレクション展と企画展の展示室を兼ねた「常設・企画」、そして教育普及事業などの「文化活動」という3つの柱が立てられました。

しかし、開館後初の「新収蔵作品展」(1975)でお披露目されたのは、学芸員が着任した時すでに収集が確定していた、梅原龍三郎(1888-1986)など画壇の重鎮といわれるような世代の作品群でした。作品収集の方針が明確に立っていない状態での幕開けに、新聞各紙にも批判的な見解が並びましたが、この後「現代にたいする批判的視座」から「戦前—戦後—現代の美術を見直していく」方向性が次第に確立されていくことになるのです。

さて、都美術館新館の揺籃期における同時代の作品収蔵の一例としては、鳴剛(1943-)や上田薫(1928-)などの作品が挙げられます。その一部は、旧館時代の最後に開かれた「第11回日本国際美術展」(1974)において、アメリカを中心とするスーパー・リアリズムの作家たちの作品と共に展示されたものでした。それらは収蔵後、幕末・明治初期の日本における写真と絵画の出会いから、技術の高度化を経て写真と絵画との対峙がせまられた当時の状況までを辿った、1978年の企画展「写真と絵画—その相似と相違」でも展示されました。

こうして東京都美術館は、作品収集や展示を繰り返すなかで、本展で見してきた「現代美術の動向」シリーズへと次第に歩みを進めていきました。東京都現代美術館では、作品を引き継いだ後も、様々な文脈や作品を補いながら、戦後美術を振り返り、それを不断に更新しながらコレクションの形成を続けています。

5.

## 1970年代後半から——国内作家の個展

From the Late 1970s Onward: Solo Exhibitions by Japanese Artists

1階の最後の展示室と3階では、東京都美術館と東京都現代美術館という2つの美術館で開かれた企画展を手がかりに、作家との関わりにおいて展示・収蔵されたコレクションの一端をご紹介します。

この一室では、1970年代の還元主義に対する反動のように広がった絵画回帰の動きや、もの派のその後の展開が見られる1975年頃から80年代前半頃までを切り取り、なかでも2つの美術館で「個展」を開催し、当館に複数の作品が収蔵されている作家たちに注目します。

東京都美術館で新館開館の4年目に開かれた現存作家初の個展は、「麻生三郎展」(1979)です。1934-35年に描かれた自画像から当時の最新作まで、第二次世界大戦を挟み、一貫して人間や人間のいる風景に取り組み続けた麻生三郎(1913-2000)の40年の画業を辿るものでした。麻生は、1939年に福沢一郎、鬚光、斎藤義重らと結成した美術文化協会展、戦後の美術団体連合展、1950年代以降の日本国際美術展を始め、東京府美術館の時代から上野に作品を展示し続けた作家でもありました。

9 一方、東京都現代美術館での日本人作家初の個展は「中西夏之 白く、強い、目前へ」(1997)です。ハイレッド・センター時代を含め、様々なメディアや領域を横断しながら展開された中西夏之(1935-2016)の40年に及ぶ活動の中から、1950年代末の連作《韻》、「読売アンデパンダン」展に出品された《洗濯バサミは攪拌行動を主張する》とともに、とりわけ1970年代以降主軸となった絵画における試みを中心に紹介するものでした。

そして1999年に開催された「草間彌生 ニューヨーク／東京」展(東京都現代美術館)は2つの美術館を通して初の日本人女性作家の個展でした。現在も続くその制作をニューヨーク滞在時代と日本時代との二部構成で振り返り、1950年代後半に渡米した草間彌生(1929-)の活動をポップ・アートやミニマル・アートなど同時代の動向との関わりにおいて位置づけつつ、渡米前の初期の活動と、帰国後1970年代後半から最新作のインスタレーションまでを含めて包括的に紹介しました。

この約10年という時間のなかに、麻生が60代後半で描いた《自己像》(1974)や、中西が絵画制作における一つの転換点を示した《弓形が触れて VI》(1978)、さらに草間が日本への帰国後集中して取り組んだコラージュ作品(1977)など、多彩な作家たちがそれぞれの在りようを示しつつ展開した独自の歩みが交差しています。

6.

## 1980年代——海外作品収蔵の始まり

The 1980s: Starting to Collect Overseas Works

本展の2章でふれた、現代美術館開館にあたっての本格的な収蔵に先立ち、数は多くないものの、東京都美術館時代のコレクションにも海外作家の作品が含まれていました。1982年、「今日のイギリス美術」展を機にまとまって収蔵された12名の作家による作品が、その始まりです。ここではこの展示のために作家が制作し、同時代的に収蔵された海外作品のコレクションに光をあてます。

「今日のイギリス美術」展は、日本で当時12年ぶりに開催されたイギリスの現代美術の動向を包括的に取り上げる展示で、東京都美術館、栃木県立美術館、福岡市美術館、北海道立近代美術館、国立国際美術館とブリティッシュ・カウンシルの共同企画で開催されました。のちに現代美術館の開館記念展として個展(1995)を開くアンソニー・カロ(1924-2014)など日本でもよく知られていた8名の作家による導入に続き、イギリス美術の多様性を示す25作家の連続した個展のように展示が構成されました。

自然環境と関わり制作に取り組むデイヴィッド・ナッシュ(1945-)は、約1か月の滞在制作を行い、奥日光の森で台風によって根本から二つに裂け、倒れた木をチェーンソーで切断し組み合わせた《門》を、展示室屋外のテラスに展示しました。リチャード・ロング(1945-)は、ロバート・スミソンなどによる大規模なランド・アートとは対照的に、自然の中を歩行するという控えめな行為を作品の核としています。都美術館の広い吹き抜け空間に展示された《イングランド・ジャパン・サークルズ》は、作家によって歩行中に見出された「地球を構成するもの」としてのスレートが、先史時代の遺跡にも見られるような単純な円形に配置され、時空を超える広がりを見せています。

これらを含む70年代後半から80年代にかけて制作されたイギリス美術の作品は、翌1983年、斎藤義重《「反対称」対角線 No.1, No.2》や、菅木志雄《界の仕切り》など、国内作家による同時代の作品とともに、都美術館での収蔵作品展「今日の美術——日本とイギリス」でもまとまった形で紹介されました。

## 1990年代から——企画展の連なり

From the 1990s: A Series of Special Exhibitions

ここでは、都美術館の「構造と記憶 戸谷成雄・遠藤利克・剣持和夫」展(1991)における遠藤利克(1950-)と剣持和夫(1951-)という2人の出品作家を起点に、彼らを介して繋がる現代美術館で開かれた2つの展覧会を通して、1990年代前半のコレクションの一端を紹介します。

「構造と記憶」展では、もの派以後の世代に属する3作家を取り上げ、木による作品が展示されました。もの派の作家たちが素材をほぼ未加工のまま呈示し、ものとなら空間との関わりに主眼を置いたのに対し、彼らは明らかに人為の関わりを示す形をもち、時間性や象徴性を孕んだ作品を制作しています。このとき新作として発表された遠藤利克の大作《泉》には、燃やして炭化させた木による円筒形／円環という極めて単純な形態のうちに、空洞を取り巻く見えないエネルギーの構造が秘められています。一方、剣持は、廃材となった木と、かつて作品の制作現場となった製鉄工場をうつした写真パネルに油彩でドローイングを施した平面作品とを組み合わせ、時間が幾重にも重なる大規模なインスタレーションを制作しました。

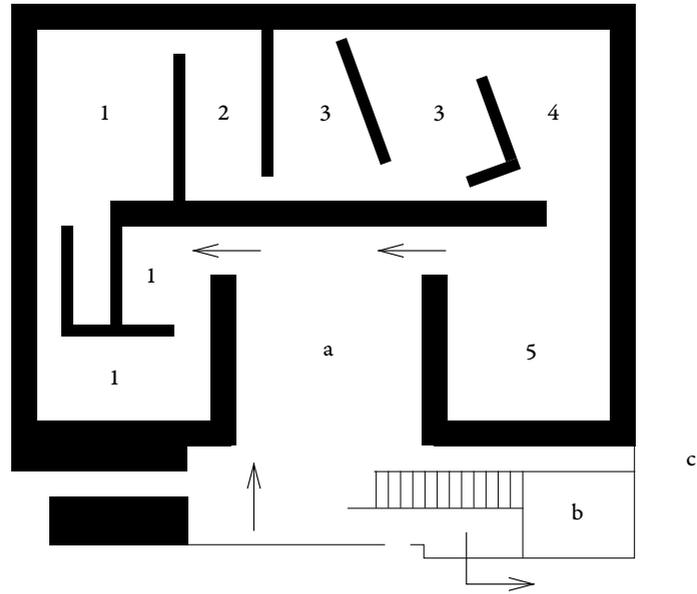
遠藤は、現代美術館における開館記念の第1弾「日本の現代美術 1985-1995」展の出品作家でもありました。1990年代は東西冷戦の終結を受けてグローバル化が進み、日本の現代美術を紹介する動きも一層加速しますが、この展示は、国際的な視点で傑出した活動をみせた作家たちを取り上げようとするものでした。ジェンダーに関わる作品を多く制作し、若手ながら注目されていた笠原恵実子(1963-)や、80年代以降、形象を大胆に用いた色彩豊かな絵画を制作した辰野登恵子(1950-2014)、当時日本を拠点としていた中国出身の蔡國強(1957-)も含め、幅広い作家たちが紹介されています。

一方、「構造と記憶」展を機に収蔵された、剣持による平面作品が展示されたのは、コレクションによるテーマ展示「時間／視線／記憶——90年代美術にみる写真表現」展(1997)でした。コンセプチュアル・アートによって美術の領域に取り込まれた写真の新たな表現を取り上げたこの展示は、収蔵作家の剣持、杉本博司、石原友明と、複数のゲスト・アーティストによって構成されました。この展示のためにサイズを変えてプリントされた石内都(1947-)の「1906 to the skin」のシリーズは、1906年生まれの舞踏家・大野一雄を撮影したものです。石内が魅せられ、モノクロームで捉えた、沢山の皺が刻まれた大野の皮膚にも、目には見えない時間や記憶が堆積しています。

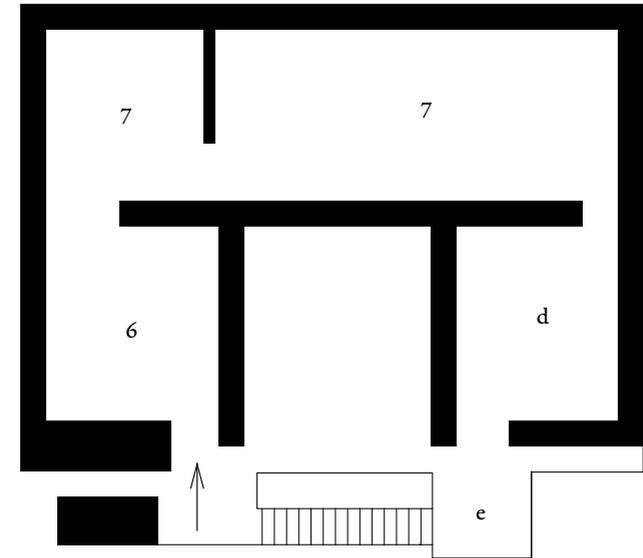
こうしてさまざまな展示を契機にコレクションが形成されていきます。本展では石内と遠藤のディレクションのもと作品が展示されました。現在進行形で積み重なる作家との関わりの中にも、コレクションの豊かな歩みが続いています。

- 1926 東京都美術館開館〈同時代美術の発表の場／小規模な作品収集〉
- 1943 都政施行により東京都美術館に改称
- 1961 『東京都美術館所蔵美術品目録』刊行〈単独で発行された東京都美術館初の所蔵作品目録〉
- 1962 「日本洋画壇の流れ」〈東京都美術館 旧館 佐藤記念室で開催された最初の所蔵作品展〉  
\*藤川栄子《かける》などを展示
- 1963 東京都美術館を会場に最後の「読売アンデパンダン」展開催（1964に中止が発表）  
\*中西夏之《洗濯バサミは攪拌行動を主張する》などが出品
- 1968 「東京都美術館建設準備委員会」を設置〈新館の開館準備〉
- 1970 東京都美術館を会場に「第10回日本国際美術展 人間と物質」開催
- 1975 東京都美術館 新館が開館〈学芸員の着任／作品収集活動・企画展の本格化〉
- 1979 「麻生三郎展」〈東京都美術館における初の現存作家の個展〉
- 1981 「現代美術の動向I 1950年代——その暗黒と光芒」〈東京都美術館、「現代美術の動向」シリーズの開始〉
- 1982 「今日のイギリス美術」(東京都美術館)  
\*デイヴィッド・ナッシュほかが日本で滞在制作
- 1983 「現代美術の動向II 1960年代——多様化への出発」(東京都美術館)  
\*菊畑茂久馬《奴隷系図》の再制作
- 1984 「現代美術の動向III 1970年以降の美術——その国際性と独自性」(東京都美術館)
- 1987 「東京都新美術館建設計画委員会」を設置〈東京都現代美術館の開館準備〉
- 1988 「東京都美術資料取得基金」を設置〈東京都現代美術館独自の収集開始、1996まで〉
- 1991 「構造と記憶 戸谷成雄・遠藤利克・剣持和夫」(東京都美術館)  
\*遠藤利克《泉》、剣持和夫《無題 1991》を新作として展示
- 1995 東京都現代美術館開館  
開館記念展「日本の現代美術 1985-1995」  
常設展示「現代美術の流れ」を開始〈常設展示室の設置〉  
開館記念展III「レボリューション／美術の60年代 ウォーホルからボイスまで」
- 1996 「日本の美術——よみがえる1964年」
- 1997 「中西夏之展 白く、強い、目前、へ」〈東京都現代美術館で初の日本人作家の個展（海外作家の初の個展は「アンソニー・カロ展」、1995）〉  
「時間／視線／記憶 90年代美術にみる写真表現」  
\*石内都《1906 to the skin》サイズを変えて新たに制作
- 1999 「草間彌生 ニューヨーク／東京」〈東京都現代美術館における日本人女性作家初の個展（初の女性作家の個展は「シンディ・シャーマン展」、1996）〉

- 1926 Tokyo Prefectural Art Museum opens 〈Venue for presenting art of the times / Modest start in the collecting of artworks〉
- 1943 The museum changed its name to Tokyo Metropolitan Art Museum due to the Tokyo Metropolis being formed by the merger of Tokyo Prefecture and the city of Tokyo
- 1961 The *Catalog of the Tokyo Metropolitan Art Museum Collection* is published (The first ever catalog of the works housed in the collection of the Tokyo Metropolitan Art Museum, published by the museum)
- 1962 “The History of Japanese Western-style Painters” (The first collection exhibition held in the Sato Memorial Gallery in the Old Building of the Tokyo Metropolitan Art Museum)  
\*works including *Hung Kimono* by FUJIKWA Eiko were presented.
- 1963 The final installment of the “Yomiuri Independent Exhibition” is held at the Tokyo Metropolitan Art Museum (exhibition ultimately cancelled in 1964)  
\*works including *Clothespins Assert Churning Action* by NAKANISHI Natsuyuki were presented.
- 1968 The “Preparation Committee for the Construction of the Tokyo Metropolitan Art Museum” was established (Preparations for the construction of the New Building)
- 1970 “Tokyo Biennale ’70: Between Man and Matter” is held at the Tokyo Metropolitan Art Museum
- 1975 The New Building of the Tokyo Metropolitan Art Museum opens (Collection activities and organizing of special exhibitions by appointed curators)
- 1979 “Aso Saburo Exhibition” (First solo exhibition by a living artist at the Tokyo Metropolitan Art Museum)
- 1981 “Movements in Contemporary Art I: The 1950s: Gloom and Rays of Light” (The start of the “Trends of Contemporary Japanese Art” exhibition series)
- 1982 “Aspects of British Art Today” (Tokyo Metropolitan Art Museum)  
\*David NASH and other artists produced work during a residency in Japan.
- 1983 “Movements in Contemporary Art II: The 1960s: Towards Diversity” (Tokyo Metropolitan Art Museum)  
\*KIKUHATA Mokuma reproduced his work *Slave Genealogy* for the exhibition.
- 1984 “Movements in Contemporary Art III: The 1970s Onwards: Internationality and Distinctiveness” (Tokyo Metropolitan Art Museum)
- 1987 The “Planning Committee for the Construction of Tokyo Metropolitan New Art Museum” was established (Preparations underway towards the opening of the Museum of Contemporary Art Tokyo)
- 1988 The “Fund for the Collection of Tokyo Metropolitan New Art Museum” was established (active until 1996) (Works started to be collected specifically for the Museum of Contemporary Art Tokyo)
- 1991 “Structure and Remembrance: TOYA, ENDO, KENMOCHI” (Tokyo Metropolitan Art Museum)  
\*ENDO Toshikatsu’s *Fountain* and KENMOCHI Kazuo’s *Untitled 1991* were introduced as new works in the exhibition.
- 1995 Museum of Contemporary Art Tokyo opens  
Commemorative Exhibition: “Art in Japan Today”  
Permanent Collection Exhibition: The “Contemporary Art From the Museum Collection” exhibition series commenced (Establishment of the Collection Galleries)  
Commemorative Exhibition III: “Revolution: Art of the Sixties –From Warhol to Beuys”
- 1996 “1964: A Turning Point in Japanese Art”
- 1997 “NAKANISHI Natsuyuki: Toward Whiteness, Intensity, Presence” (First solo exhibition by a Japanese artist at the Museum of Contemporary Art Tokyo; First solo show was “Anthony Caro”/1995)  
“SURFACE EXPOSED: Photography in Art of the 90’s”  
\*ISHIUCHI Miyako’s series of work *1906 to the skin* was made a new version in a different size
- 1999 “Love Forever: Yayoi Kusama, 1958-1968 / In Full Bloom: Yayoi Kusama, Years in Japan” (First solo exhibition by a female Japanese artist at the Museum of Contemporary Art Tokyo (First solo show by a female artist was “Cindy Sherman”/1996))



- |                                     |                                                                                      |
|-------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 「読売アンデパンダン」展と、<br>20年後の「1960年代」展 | 1. The “Yomiuri Independent Exhibition” and the “1960s<br>Exhibition” 20 Years Later |
| 2. 30年後の「1960年代」展                   | 2. The “1960s Exhibitions” 30 Years Later                                            |
| 3. 「人間と物質」展と、1970年代                 | 3. “10th Tokyo Biennale: Between Man and Matter” and the 1970s                       |
| 4. 東京都美術館新館の開館                      | 4. The Opening of the New Building of the Tokyo Metropolitan Art<br>Museum           |
| 5. 1970年代後半から<br>—国内作家の個展           | 5. From the Late 1970s Onward: Solo Exhibitions by Japanese<br>Artists               |
- 
- |                   |                     |
|-------------------|---------------------|
| a. アルナルド・ポモドーロ    | a. Arnaldo POMODORO |
| b. トミエ・オオタケ(大竹富江) | b. Tomie OHTAKE     |
| c. 鈴木昭男           | c. SUZUKI Akio      |



- |                      |                                                    |
|----------------------|----------------------------------------------------|
| 6. 1980年代—海外作品収蔵の始まり | 6. The 1980s: Starting to Collect Overseas Works   |
| 7. 1990年代から—企画展の連なり  | 7. From the 1990s: A Series of Special Exhibitions |
- 
- |             |                    |
|-------------|--------------------|
| d. 宮島達男     | d. MIYAJIMA Tatsuo |
| e. アンソニー・カロ | e. Anthony CARO    |

Photo Credit

©NAKANISHI NATSUYUKI (p.21)

Keizo Kioku (p.23)

Shizune Shiigi (p.26 above)

\*会場の年表への画像提供(東京都美術館の展示風景写真及び印刷物): 東京都美術館

Images featured in the chronology (exhibition view photographs and printed materials of the Tokyo Metropolitan Art Museum)  
provided by: Tokyo Metropolitan Art Museum

執筆

水田有子

翻訳

ベンジャー桂

デザイン

三木俊一(文京図案室)

編集・発行

東京都現代美術館 ©2022

Texts by

MIZUTA Yuko

Translated by

Kei BENDER

Designed by

MIKI Shun-ichi (Bunkyo-zuan-shitsu)

© Museum of Contemporary Art Tokyo 2022